



朝のこない夜はない

一番大事な今を 一生懸命生きましょう

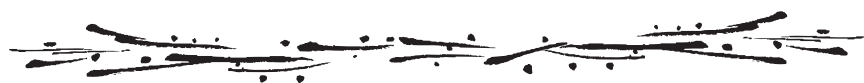
副山首 鈴木正修

『莫妄想』という言葉があります。中国唐代の禅僧・無業禅師の言葉です。この人は生涯、誰が何を尋ねてもただ、『莫妄想』（妄想する莫れ）とだけ答えたと言われています。

妄想というのは、人間がいくら考えても解決のつかない余計なことを考えることです。

お釈迦さまの時代、当時の思想家たちの間で流行の議論がありました。

「この世界は有限であるか無限であるか」とか、「靈魂と身体は同一であるか各



別であるか」とか、「人間は死後も存在するか存在せぬか」などということですが、これらに対するお釈迦さまの答えを、哲学好きの弟子マールンクヤが執拗に尋ね、もし答えていただけないのであれば還俗するとまで言いました。

その時、お釈迦さまは「毒箭の喩」として広く知られる譬喩を語られ、マールンクヤを諭されました。

「マールンクヤよ、ここに人があつて、毒矢に射られたとするがよい。その時、彼の親友たちは、彼のために医者を迎えるであろう。だが彼は、この毒矢を射た者は何びとであるか、また、この矢を射た弓はいかなる弓であるか、あるいはまた、この矢はどんな形をしているか、それらのことが解明されぬうちは、この矢を抜いてはならぬ、治療してはならぬ、と主張したならば、どんなことになるだろうか。マールンクヤよ、彼はまだ、それらのことを知り得ないうちに死んでしまふであろう。

マールンクヤよ、世界は有限か無限か、靈魂と身体は同一か別か、人間は死後も存在するか否か。そのような問題に答えたとしても、われらの苦なる人生の解決にはなり得ないのだ。われらは、この現在の生において、この苦なる人生を克



服しなければならぬのである。それには、マールンクヤよ、わたしの説かないことは、説かないままに受持するがよい。わたしの説いたことは、説いたままに受持するがよい」

これを一言でいえば『莫妄想』という事だと思えます。

『莫妄想』という言葉が今、世間に知られるようになったのは、鎌倉時代の禅僧・無学祖元が執権・北条時宗に与えた言葉としてです。

時宗は幼時から臆病者と言われていたそうです。それである時、無学に教を乞います。

「わたしにとって最も忌むべきものは臆病です。どうすれば臆病を克服できますか？」

「臆病のよって出るところを断ち切るとよい」

「では、それはどこから出てくるのですか？」

「時宗よ、それはおまえ自身から出てくる」

無学にそう言われて、時宗は驚きました。

「臆病は、時宗の最も嫌うものです。それがどうして、この時宗から出てくるの



朝のこない夜はない (204)

ですか？」

「時宗という自己を捨て去ってこい！」

「どうすれば捨てることができますか？」

「いっさいの妄想をすること莫れ」

まさに禅問答という感じですよ。

臆病者と言われても時宗は執権です。武家の棟梁です。まずそのプライドを保ちたかったと思います。人一倍思ったでしょう。

家来に接する時、敵に対する時、正に死に臨まんとする時、そこで、無学は言ったのです。「余計なことを考えるな！」。言外に「今やるべきことをしっかりとやれ！それだけだ」という意味を含んでいると思います。

この教えは、過去にこだわらず、未来に不安を抱き、変なプライドにじやまをさされていることが多い私達にとっても有用な教えだと思えます。

一番大事な今を一生懸命に生きる、これがお釈迦さまの教えでもあるのです。